



■評者
佐川 光晴
(作家)

小 熊 英 二 著

全共闘運動の時代背景読み解く

〈本書は全共闘運動をはじめとした「あの時代」の若者たちの反乱、日本の「一九六八年」を検証する〉。上下各1000頁を超える大著の冒頭を飾るにふさわしい宣言をもって、著者は「あの時代」の解明に着手していく。

当時の主役であった若者たちは、敗戦後の、民主主義が最も輝

を貸さずに私腹を肥やし、教授たちも院生や助手を徒弟さながらにこき使う。

膨大な文献を駆使しながら時代背景を読み解く著者の手際は鮮やかで、ゲバ棒とヘルメットで武装し、解放区を求めてバリケードを築いた若者たちにはやむを得ざる理由があつたのだと納得がいく。そして、それが分かるだけになおさら、その後に彼らの反乱がたどる末路には暗たんたる思いを禁じ得ない。

政治闘争とは、獲得目標を定めて繰り広げられるものだろう。しかし全共闘が求めていたのは、「自己否定」を通じて疎外された自己を回復することだった。しかも本来自らに向けるべき厳しさを、衆を頼み、大学教授という手ごろな他者にぶつけたのはいくら悔いても足りない誤りだった。

市民を巻き添えにする暴動やセクト間の内ゲバによって世の支持を失う中、ついには東大・安田講堂の攻防戦に見られるごとく敗北が自己目的化されていく。「あの時代」が垣間見せた可能性を探ることも大切だが、「われわれは、彼らの失敗から学ぶべきである」とする著者の言葉が重く響くゆえんである。

いていた時期に初等・中等教育を施された。しかしベトナム戦争による特需景気を背景に高度経済成長に突入。産業界の要請で高校への進学率は急上昇し、受験競争が激化。ようやく大学に入ったものの授業はマスプロ。おとなしく卒業しサラリーマンになればよいという暗黙の圧力が支配するキャンパスで、反乱へと向かうエネルギーが徐々に蓄積されていく。

日大をはじめ、学生が闘争へと至る原因は大学側にある場合がほとんどだった。「学問の府」「大学の自治」を標ぼうしておきながら経営者は学生の要望には一切耳